

戦後日本社会における女性たちの 「もうひとつの」個人主義

——宮城学院同窓生の生活史の分析から——

片瀬 一 男
相澤 出
遠藤 恵 子

1. はじめに

1-1. 問題設定

本稿は、宮城学院同窓生を対象としたインタビュー調査の内容を検討し、戦後の女性の生き方の多様性の一端を明らかにし、さらにこうしたライフヒストリーの研究が戦後の思想や女性、社会の歴史を研究する際に有する意義を示そうとするものである。ミッション系女子教育機関は、戦前以来、女子教育の貴重な担い手であっただけでなく、公立とは異なる教育理念、教育プログラム、学風を有していた。これらは戦後も、女子大学・短大の伝統として受け継がれ、そこでの教育や体験は、卒業生にとって、固有の集合的記憶として共有された¹⁾。その集合的記憶は、同窓生たちの卒業後の人生にも影響を与え、ひいては戦後における女性の生き方の多様性を生み出す源泉のひとつとなったと考えられる。筆者らは以前から継続して、ミッション系女子教育機関の同窓生の集合的記憶について研究を行ってきた。たとえば宮城学院同窓生が在学時の思い出を綴った文集の内容を量的分析というかたちで検

討し、集合的記憶のあり方のコーホート（世代）による傾向に関する検討を行ってきた（片瀬 2019）。

これに対して、本稿では、こうした同窓生のそれぞれの世代の集合的記憶のもととなった世代ごとの体験を、インタビューから得られた談話の質的研究から明らかにすることを試みた。今回は、戦後直後に在籍した同窓生の談話から、同時代の同窓生の集合的記憶と体験の詳細を明らかにする。こうしたアプローチによって、当時の宮城学院同窓生の集合的記憶を理解するだけでなく、当時、同様のミッション教育を経験した女性たちの生活世界の諸相を理解する手がかりを得ることも期待できる。

1-2. 研究の方法

談話の分析に入る前に、本稿で用いる視点・方法について述べておきたい。本稿では、一連のインタビュー調査の対象者のうちの一人の生活史をとりあげ、その話者の談話を検討する。こうした個人のライフヒストリー（生活史）から社会の変化、すなわち歴史事象を解明しようとする試みは、これまでも心理学や社会学の領域で行われてきた。とりわけ社会学者は、ライフヒストリーを読み解くことによって、現代を生きる人々の声に直接、耳を傾け、それを記録し、理論的に解釈することで社会現象の成り立ちを解明しようとしてきた。

こうしたアプローチについて、近年では、話者と聞き手の相互作用と、それによる歴史的な事実の再構成を強調する立場から、「ライフストーリー研究」といわれるようになってきている。この用語の変化には、研究の「方法論的転回」というべき認識論の転換があった。ライフストーリー研究ではインタビューにおいて、目前の話者の語る「ストーリー」を聴き、記録し、解釈する調査者の立ち位置について、さらにはその結果生み出される「作品」としての分析について、徹底した方法論的な内省が求められることになる。

日本におけるライフストーリー研究の代表的な論者である桜井厚の議論にもとづいて、ライフヒストリーとライフストーリーに関して亀崎（2010）が行った整理によると、ライフヒストリー研究とは、ライフストーリー（対象者の語る個人史）のほかに日記などの個人的資料、専門的知見の入った文献資料なども加えて「個人の人生の出来事」を「伝記的に編集して記録」したものである。それは、「社会に生きる個人を対象にしつつも、研究の焦点は歴史や社会の把握にある」（亀崎 2010：15）。これに対して、ライフストーリーは、個人の口述すなわちインタビューの場で対象者の語った人生の記録そのものであり、他の資料による編集が加わっていないものを意味した。つまり、ライフストーリーが「素材」であるなら、ライフヒストリーはそれをもとに伝記的に編集された「作品」であることになる。

本稿は、上記の整理を踏まえて、まずはライフヒストリー研究である。社会史としての生活史という点に重点を置きつつ、そこで参照すべき貴重な資料である歴史の証言として、話者の談話を活用する。具体的には、一人の話者の戦後の生活史と、その人の視点から捉えられた戦後の風景、世相の変化に関する体験談を通じて、戦後の思想、女性や家族、地域の変化に関する新たな認識の手がかりとなるものの提示を試みる。

2. 研究状況と調査の概要

2-1. 本研究のテーマに関する研究状況

本稿は、筆者らの共同研究「東北地方における女子ミッション教育の戦後史」の一環として行われた、宮城学院同窓会会員を対象とした聞き取り調査に基づくものである²⁾。同窓会役員経験者など同窓会を代表する関係者に、在学中の思い出を中心に、その方のライフストーリーをうかがった。量的調査からのアプローチが難しい学校生活や卒業後の生活の具体的なかつ詳細な部分について話をうかがうことによって、戦後直後のミッション系女子教育経

験者の生活史上の特徴を捉えることを試みた。

話者の選定は、同窓会からの推薦・紹介による。現在まで、詳細な聞き取りを4名の方に実施した。いずれも戦後直後の時期に、宮城学院で学生生活をおくった人たちである。本稿では、そのうちの一人のライフヒストリーを検討し、宮城学院で学び、その後も同窓会の活動を担ってきた人たちの談話に見出される特徴を提示する。今回の調査対象となった話者の人々は、卒業生の平均的な姿ではなく、同窓生の世界の一面が顕著に体现された事例といえる存在である。それゆえに、同窓生に見出される生活史上の特徴（思想や行動、ライフコース）の一面が明瞭に現れる。そのため、こうした代表的人物の像は、数こそ少ないものの「理念型」のように機能し、同窓生の生活世界を理解する上で手掛かりを与えるものとなる。

2-2. 戦後のミッション系女子高等教育経験者のライフヒストリーに関する研究状況

過去の女子ミッション教育に関しては、教育社会学などの領域で、カリキュラム上の特徴やキリスト教を反映した教育理念について研究がなされてきたものの、同窓生の在学中の体験や卒業後の生活のライフヒストリーについて論じたものは少ない。青山女子短期大学の卒業生を対象としたインタビューをもとに、在学時の記憶や卒業後の生活史にアプローチした河見（2005）や加納（2011）の論考があるものの、これらの研究では聞き取りの一部の抜粋とその紹介にとどまり、何らかの視点からの分析は加えられていない（それでも本研究の聞き取りと符合する同時代の同種のデータの紹介であり、興味深い）。

戦前、戦後における日本の女性クリスチャンのライフヒストリーを研究したのものとしては、牧師夫人のライフヒストリーなどを検討した川又（2002）や、一人の女性クリスチャンの生涯を日本の近代化の過程と重ねながらとり

あげた川村（2011）がある。これらの先行研究に対して、本稿の場合、必ずしも対象となる話者がクリスチャンに限定されておらず、むしろミッション系女子教育機関の同窓生であるという点で、先行研究にはない射程を有する。すなわち、女子ミッション教育が、狭義のキリスト者の世界の外側としての日本社会に及ぼしうる社会、文化的影響について考察できるというメリットがある。

女性史という点では、戦後における女性の生き方の変化については、これまでも社会史の領域で研究にされてきた（大門他 2003）が、ミッション系女子教育機関の卒業生に触れたものは少ない。その点、宮城県の場合、『みやぎの女性史』（1999）が、戦前から現代にいたるまでカバーした包括的な先行研究として存在する。このなかには戦後の宮城学院同窓生の聞き取りを取り入れた叙述（宮城県・みやぎの女性史研究会 1999：71～75）や県内のミッション系女子高等教育の動向に関する叙述（同上：154～161）も含まれている。本研究はこうした女性史、社会史研究に対しても、新たな知見をもたらしうるものである。

3. ある宮城学院同窓生の戦後の生活史

3-1. 宮城学院入学前

本稿の主人公は話者 H. K さんである。1933年生まれで仙台市出身、旧制宮城高等女学校から宮城学院に在籍し、新制の四年制大学に学んだ人である。同窓会副会長を務めるなど、同窓会を長年支えてきた人である。女学校三年の時、戦後の学制改革を経験し、宮城学院高等女学校から宮城学院女子大学に進学した。英文科に学び、二年修了生として卒業している。

H さんの生家のことからライフヒストリーを検討していく。H さんの父は埼玉県生まれ、東京近郊の出身である。鉄道（特に電車）関係の技術者・技術指導者であった。高等小学校卒業後、東京の鉄道関係の会社に就職し、

そこで技術を学ぶ。「運転手というよりは、ずっと先生として、ずっと教育の方やっておりました」という人であった。当時の先端技術の専門家であり、社会階層的には新中間層にあたる。学歴は「父はちゃんとした教育は高等小学校、田舎の高等小学校」ではあったが、仕事をしながら東京の大学の「夜学」で学び続けるなど知識欲、向学心のある人であった。仙台に市電が造られる時、指導者として招聘された。Hさんの父が新しい知識、技術、高等教育と親和性を有する人であったことは、その後のHさんの人生にも影響を及ぼしていると考えられる。

Hさんの母は、福島県出身で、「名字帯刀を許された旧家」で豪農の出身であった。福島で高等小学校を出た後、仙台では「朴沢の、昔は裁縫学校」（現在の朴沢学園）に入学し、「女学科の方へ卒業」している。当時の朴沢学園とは、最先端の裁縫教育で注目されていた「私立松操学校」である³⁾。Hさんの母も、当時の先端を行く女子教育を受けた経験の持ち主であることに注目しておきたい。

こうした両親のもとで育ったHさんが大学に進学するきっかけをつくったのは、母方のいとこであった。戦後直後、Hさんの実家も余裕がなく、母も「女が大学だなんてとんでもない。生意気になるだけだって言って」進学には当初否定的であった。Hさん自身、「そのころ家も決して豊かじゃなかったから。勤めに出ようかなと思って」いた。ところが、母方のいとこで、クリスチャンの大内三郎氏（後に東北大学名誉教授、山梨英和学院長）が、Hさんの宮城学院女子大学への進学を強く勧めた。「全部私のいとこは一女高なんです。それが、どうしてもおばちゃん、K（Hさんの名前）のところはね、宮城に入れたら良いんじゃないかっていうことで、私は宮城に入ったんです。そのいとこが、これからは女も大学に行く時代だと」叔母であるHさんの母に言ったという。それに納得して「あんなに女が大学に行くなんてとんでもないわって言ってた母が、ガラリ変わりましたね。あんたも大

学に行ってみたらいいんじゃないの」と言うようになった。

この談話からは、Hさんを取り巻く周囲の人々の様子が見えてくる。いここ達の当時としての学歴の高さからは、Hさんの生家とその親族の文化資本の高さが推測される。さらにクリスチャンの親族の存在、そのクリスチャンのいとこの持っていた新しい時代の感覚、加えて、女性の進学や教育に対する母親の柔軟な姿勢と理解の高さである。こうしてHさんは、当時四年制大学となったばかりの宮城学院女子大学に進学することとなる。

3-2. 在籍中の思い出——終戦直後の仙台と宮城学院での記憶——

ここからは聞き取りの中心内容となった終戦直後の宮城学院でのHさんの体験談をみていく。女学校、新制高校、そして大学進学から卒業まで、在籍中の思い出に関してまず触れられたのは、同学年の友人たちのこと、同学年の雰囲気についてである。Hさんは、自分が優れた友人たちに恵まれたと話す。

「私が英文科入った時はもう一女高から二女高、三女高。県立の学校からたくさん入って来てたんです。南からもだいぶ入りましたけど。一女高あたり、今だったら皆東京あたりにね、行く人が、日本女子大に受かってるとかそういう人たちもいたんだけど、やっぱり東京に行くってことは食料がないし、たぶんね下宿するところだってどうなるか。親は東京には出したいくないわけですよ。だから、すごく優秀な人が入ってきましたよ。それから、私が出た英文科はみんなレベルが高かったと思いますよ。私、今無二の親友になってる人は一女高から来た人なんですけどね（中略）本当にね、優秀な人たちがいっぱい入ってらしたんです。とっても楽しい2年間ですね」。

このHさんの談話からは、終戦直後の混乱と、それゆえに宮城学院に優秀な同級生が集まった、という認識がうかがわれる。東京が戦災から復興を

遂げていないと、当時の人々が認識しており、そうした混乱が収まらない東京に、娘を進学させることに躊躇する、当時の女学生の親世代の判断があったことも想像に難くない。こうした状況があり、Hさんは、優秀な友人たちが同級生となり、親友にも恵まれたと、自身の同学年について振り返る。しかも、こうした優れた友人たちは、他の公立の女子高校の卒業生でもあった。終戦直後の混乱期ゆえの、同学年の友人たちとの出会いが、強く意識されている。こうした時代状況に左右された人々の出会いやつきあいは、Hさん、あるいは宮城学院だけのものではなく、当時の地方都市の女子大学、短大とそこで学んでいた人々の間にも生じていた可能性がある。

さらにHさんの談話は、この時期のミッション系教育機関ゆえに体験された時代の変化の様相を伝えている。まずは大学の復興をめぐる思い出である。宮城学院などミッション系の教育機関は、海外からの支援もあり、復興がいち早く進んだが、公立はそうではなく、友人たちには苦勞した人もいたと、Hさんは話す。

「一女高の人から聞きますと、二部授業だったり、公立はなかなかひとつずつ建てていかなきゃいけないものですから、じゃああっちの学校行ったりこっちの学校行ったり、そこに行って勉強してあげようなんて言ったりしてね、って、いまだに言いますけど。(中略)だから私は戦後の本当に減茶苦茶な時代に、無事に育てて頂いた宮城学院に、本当に心から感謝しています。あそこに行って勉強させて頂いたから、本当にこういう風にね、生きていられたと思うんですよ。だって、全て戦前の道徳は全部ひっくり返ったんですから。(中略)聖歌隊なんかに入れてもらったりなんかして。そういう楽しいこともあったりしたんですけど。ちゃんとつぼみ会とかに入って、YWCAに加入する人もいたんです。真面目に。でも、私なんかさっぱり。いい加減な聖書のお勉強。でも、毎日毎日繰り返された礼拝っていうのはやっぱり、あの時の戦争の大混乱の中では本当にありがた

いことだったと、今、この年になって感謝してますね」。

この談話からは、公立に比べて宮城学院の教育環境が整っており、そこの学びが貴重なものと感じられていたことがうかがわれる。しかもその教育は、当時の公立のものとは大きく異なり、これもまた忘れがたい記憶となっている。聖書の勉強や礼拝、聖歌隊の経験が、宮城学院での学びの思い出として象徴的に登場してくる。

これに加えて H さんが触れたのは、戦後の仙台における宮城学院の象徴としての講堂の存在と、それが担った役割についてであった。終戦直後、戦災のあった仙台で、文化事業の会場となりうるところは限られていた。H さんは講堂での文化的な体験や、戦災を免れた宮城学院の講堂が「仙台の市民センターだったんです」と、一時期、市民会館などの施設が整備される以前（H さんの記憶では、昭和20年から大学在学中の頃まで「6、7年くらい」）、仙台の文化のセンターとして機能していた様子について話した。講堂を会場とした事業のなかで H さんが目にした人物や団体は実に多様で、そこからは時代の雰囲気を感じられる⁴⁾。こうした講堂で催されたさまざまな文化事業に接したことも、H さんの記憶に鮮烈に残っている。これらの一連の経験をも含めて、H さんは「戦後、あのほんと滅茶苦茶な時代に」、宮城学院に在籍し、「あの（宮城学院の）塀のなかに護られた」と感じている。

談話の中でも、満州などからの引揚者が町にあふれ、仕事の獲得に苦勞する状況、ハイパーインフレの経験などが思い出され、当時の社会、経済的な混沌の深さも併せて語られていた。そのなかで、周囲に比べて整った環境で、質の高い教育と、貴重な文化的体験をもたらしたのが、宮城学院であった。これは H さんだけでなく、同世代の宮城学院の学生、生徒たちの体験でもあったと考えられる。戦後の混乱と、戦前と戦後における社会的な価値の大転換のなかで、戦前から一貫した教育方針をもった学び舎で、しかも周囲の学校に比べて環境の整ったなかで学生生活を過ごした経験が、この談話

となっている。

これはHさん一人の経験ではないと考えられる。宮城学院をはじめ、戦前から続いてきたミッション系教育機関にとって、戦前、戦中と戦後との状況変化が大きかったことは想像に難くない。基本理念としてのキリスト教教育、さらにはミッション系教育機関の特徴としての英語教育は、とりわけ戦中の時期、否定的な扱いを受けてきたからである。文化的に存在感は大きいものの、日本社会全体でもそうだが、特に地方において社会的に少数派であり、教職員、学生たちは、文化的にマージナルな集団であった。戦後の道徳、文化における大転換を生きる中で、当時のミッション系女子大学、短大で学んだ人々は、自分たちの準拠する学び舎の社会的評価が一変する様を体感したと思われる。『宮城学院七十年』の「目次」が象徴するように、宮城学院とその教職員、生徒、学生たちにとって、昭和12年から20年までは「苦難時代」であり、昭和21年から30年は「躍進時代」であったのであろう。戦前、戦中、戦後の価値転換を、最も極端な形で体験した人々のなかの一群として、ミッション系女子教育機関に学んだ人々がいた、と考えることもできよう⁵⁾。

しかも、この戦後の変化は、英文科で学んでいたHさんにとって、社会に出る条件をもたらすものとなった⁶⁾。Hさんはアルバイトをしながら学生生活を送っているが、そのアルバイトで活きたのが大学で学んでいる英語の力であった。

Hさん「今でいうアルバイト。あの頃はね、進駐軍がいっぱいいるみたいでしたから。英語がね、今よりずっと大切だったんです。町の中に英語がね。英語ができないと困るわけです。商売はね。ですから、そういうところでアルバイトいたしましたね」。

—— ということは、英語を使わなければいけないような場所で。

Hさん「そうですね。例えば、物売りね。こういうものがいくらだとか

その程度のことだって、言えなかったんだから。

—— 店員さんみたいなことですか。

Hさん「そうですそうです。ずっと店員です。それで、今は無くなりましたけど、さくら野ね。昔、丸光って言ってた、あそこは外国の兵隊なんかがいっぱいいたところですから。買い物する人が多かったから。そういうところに学校終わってから、夕方。店おしまいになるまでとか、そういう風にして働きました。アルバイトしましたね。アルバイトなんて言葉もその時はまだなかったからね。あと、母もちょっと倒れたりしたものですから。だから、大学の2年の時は母の看病もしながら」。

後述するが、宮城学院で鍛えられた語学力は、Hさんのその後の人生にとっても、欠かせないものとなる。Hさん自身、他の箇所「英文科に行ったおかげ…英語ができたから別な世界が開けたんですね」というほど、宮城学院での学びがもたらしたものは大きかった。こうした語学を学生に教授した当時の宮城学院の教師たちの多くが、戦後の変化を象徴する人々でもあった。すなわち戦後、宮城学院に戻ってきた多くの外国人教師たちであった。そこには戦前から宮城学院に勤めてきた、名物教師たちも含まれていた。こうしたネイティブの教師たちから学んだ英語教育について、Hさんは楽しそうに振り返る。

「話し戻しますけど、宮城の、終戦が私1年生だったんですけど、2年くらいにミッションナリーがたくさん戻っていらしたんです。(中略)私リンゼイ先生に習ったんですけど、ハンセン先生は音楽の先生⁷⁾。リンゼイ先生がそれこそPHの発音はアーとこうペロ。PHとかTRとか。本当、高等学校3年生の時は本当におっかなかったんですけど。いまだにでもね、『ゴールデン』なんて暗唱できるくらいね⁸⁾、やらせられたんですよ。だから、本当にネイティブのね、良い発音を教えていただいたんです。私たちは一番良かったです。ゲルハートさんとそれから、リンゼイさ

んに習ったし、それからあと…」。

Hさんは、この他にも多くの教師の名前と思い出を楽しそうに話してくれた。こうした談話からは、当時宮城学院に続々と戻ってきた外国人教師たちの、一人一人の個性まで伝わってくる。こうした思い出から、当時の宮城学院における教師と学生の近さ、当時の公立の学校にはなかったと思われるような、「家庭的」な雰囲気や関係性が感じられる。

Hさん「ええとそうね。前はいいところって言うのはその通りなんですけど、なんていうのかな、県立やなんかと違って、上級生なんかとは、母（義母）の時代は⁹⁾、もっともっと親しみがあったそうなんです。1年2年違ってたって、みんな一緒にね。私たちの時代は人数多くなっていますから、そんなことはなかったけど。でも、他所の学校にはない雰囲気だったんじゃないかな。今考えてみると。うーん、他所の学校がわからないんですけど。一女から来た人に聞くとね。ギスギスはしてなかったんじゃないかな。みんな陽気でしたよね。なんていうのかな、私たちの時代は厳しい時代だったけど、学校にいる間はとっても楽しかったものね。先生も威張ってらっしゃらなかったですよ。先生方となんていうの、友達付き合いではないけど、先生と家庭的にいつも。先生のお家遊びに行ったりね。あれ当たり前だと思ってたから私。よく比べられないんだけど、考えてみると、先生は友達とは思わなかったけど、ええ。途中で会ってお辞儀しなかったら、怒られましたから。ええ」。

—— 結構厳しいですね。

Hさん「でも、先生のことも、広く友達扱いしてる連中もいたものね」。

—— あたたかい感じですね。

Hさん「そうですね。あんまり学校の先生だって考えなかったんじゃないかな。先生には日本一の同時通訳になった人もいましたけどね。まあ、大体において、みんな謙遜もそんなに。厳しくなかったのかな」。

—— だけど、先ほどおっしゃったみたいに、一女高、二女高から入ってこられたお友達とかも、雰囲気違うとかおっしゃったんですか。

H さん「そうです。なんかね、ゆるいっていうかなんていうか、のんびりしてるっていうか。そういう感じだったんですよね。だからみんな、割と仲良かったんです。どこの学校も、あんなだと思ってたからわからないけど」。

H さんは、公立の他の学校から進学してきた友人たちの言葉も参照しながら、宮城学院の「のんびり」した「家庭的」な雰囲気について話す。日本人教師も含めて、教師たちとその家族と学生の距離の近さや親しみやすさ、学生同士の仲の良さ、こうした思い出が、友人たちとも共有され、学生生活のよき記憶となっている様子がうかがわれる。こうした在学当時の良き思い出は、共有された集合的記憶として、同窓生のつきあいを支えている¹⁰⁾。

3-3. 卒業後のあゆみ

上記のような大学での生活を、H さんは二年で終えて卒業した。当時、まだ学制移行期であったためか、H さんたちの学年の同級生の多くは、正式に二年で卒業したという¹¹⁾。卒業後、H さんは就職した。もともと教職に就きたいという希望をもっていたが、当時、外地から引き揚げてきた教員経験者が教職に応募し、そうしたベテランの教員経験者が、仙台とその周辺の学校の職を占めていた。教職に就くことが困難であったため、H さんは仙台市内の有名百貨店に就職した。この就職活動の時にも活路を開いたのが、英語であった。

「学校の I 先生が、通訳を募集しているから行ってごらん」というので、就職試験を受け、採用された。「アメリカ人のお客様がとにかく多い」という職場は、宮城学院で鍛えられ、得意でもあった英語が活かせる場所であった。「普段は支店長さんのお茶くみ秘書」と事務作業を担当し、「時々英語

は使え」たという仕事に、やりがいと楽しさを感じていた。

ところがそこに、急に縁談が舞い込んできた。就職してわずか1年で、21歳の時に結婚することになった。親が決めた縁談であり、地元の有名な商家に嫁ぐこととなった。「うちの父にH家の方から縁談が入りまして、こんな楽しい毎日なのにどうして結婚しなければいけないんだって」と、泣く泣く会社を辞めることとなった。ただし、興味深いことに、姑をはじめH家とその親族の女性たちの多くが、実は宮城学院の同窓生であった。

—— 先ほど、お姑さんが宮城。

Hさん「はい、そうです」。

—— 先輩になるんですね。

Hさん「そうですね。私の義母も、主人のお母さんも、主人の妹、今小姑ですけど。叔母が3人、2人かな。だからみんな、全部宮城。嫁も宮城。だからもう同窓会」¹²⁾。

親族間で共有される話題、人物、思い出が存在する環境がそこにはあった。同窓生としての集合的記憶の共有、宮城学院の教育方針や価値理念、そこでの教育内容の共有やそれらへの信頼が、嫁ぎ先の親族間にあることに注目したい。

親が主導した見合いから旧家の商店に嫁いだとなると、イエ的な世界の、専業主婦的な立場に置かれたと、つい考えられそうになる。しかし、Hさんの結婚後の生活史には、イエの伝統的女性像、あるいは日本型近代家族の主婦像を超えているところが多々見出される。まず、イエとその家業のなかでのHさんの活躍である。H家は食品加工業を家業としていた。夫は職人であり、性格も店の中で仕事に打ち込むことを好む人であったという。

「最初ね、手でやっている時はそんなのやっつけられなかったんですけど、だんだんだんだん機械化して。外に出るとやっぱり、いろいろ商売のチャンスがあるものですから。やっぱりお付き合いしてそこで、私が行っ

たら買ってくれるみたいなの。そういう商売のね、色々ありますので。主人は職人で、もう家の中でやることしかできない人でしたから」。

当初はHさんも家内で、手作業中心の家業の一端を担っていた。これは生活実態である家業経営体としてのイエでは珍しくない¹³⁾。しかし、Hさんの型破りなところは、H家の営業として外回りの仕事を担当しているところである。夫に代わり、取引先と仕事をしたのはHさんであった。つまり、家業という経路を通じて、社会の公的場面で活躍しているのである。意外な取り合わせだが、伝統的な家業の世界を経由しつつ、社会で活躍する女性の姿がここにある¹⁴⁾。

さらに、営業とも関わるが、Hさんはかなり早い時期に、自動車の運転免許も取得している。これも当時の女性としては型破りであった。きっかけは、子守りの「ねえや（女中）」の結婚であった。それ以前から家業だけでなく家事も担ってはいたものの、子守りをする人がいなくなることから、家事の負担が一層大きくなることが予想された¹⁵⁾。そこで「ねえや」の結婚前に免許を取得するべく、Hさんは自動車学校に入ったという。

「うちの父と母はあきれてましたけどね、実家の父は喜んで、とってこい、と言って定義山のお守りまで買ってきてくれて」。

実家の父は、乗り物、しかも新しい技術に関わるものに対して自身も興味があって、理解を示し、後押しした。もう一方で興味深いのは、H家の舅、姑も「あきれて」いたが、決して止めてはいないという点である。先ほども触れたが、Hさんが店の営業として、社会に出ているH家である。当時の女性としては型破りな行動をとるHさんであるが、その周囲の人々が、Hさんのこうした活躍を可能にしている点を見落としてはならない。

「うちはいわゆるオートバイみたいので配達だのなんだのしていたんですけど、ひとつうちでも国産の新しい自動車買ったんですね、それで私も車の運転してみたいな免許取ってみたいなど。というのは進駐軍の時代に、

いろいろな奥さんたちとお友達になったんですね。ここに進駐軍の家族がおりましたから。その奥さんたちのお家に呼ばれて、アメリカの生活ってものを垣間見るわけね。自家用車を奥さんが運転してね。(中略)あの、そういう風になってみたいなあと思って自動車学校行ったら、男の人ばかり60人くらい、女が3人、お嬢さんたちだったなあ、私はもう子ども2人いましたけど」。

実技試験でかなり苦勞をしたが、最終的にHさんだけは試験を突破し、免許を取ることができた。こうしてHさんは、自分でも「2人か3人くらいしかいなかったと思いますね」というように、当時の仙台では珍しい、数少ない、女性の免許取得者の先駆けとなった。Hさんが免許を取った後に、夫も免許を取得したという。夫とふたりで、故障の多い当時の国産車のエンジンを直しながらドライブをしたという思い出も、楽しそうに話してくれた。こうして夫婦でドライブを、互いに運転して楽しむという風景は、今でこそありふれたものであるが、女性ドライバーが数少ない当時(談話から昭和30年代の思い出と推測される)としては、珍しい夫婦像であったといえよう。

Hさんの社会における活躍は、ボランティア活動というかたちで、一層幅を広げることとなる。まずは地域内でのボランティア活動であった。自治会からの依頼があり、小学校でPTAの活動、さらには民生委員も務めている。民生委員は長期にわたって務めることになった。

PTAの活動に関わり、市内の大会に参加するうちにHさんは、「宮城を出てる人多いんですよね。みんな割りと一生懸命」活動していることに気づく。こうしたボランティア活動、しかも地域の公的な場でのボランティア活動のなかで、宮城学院の同窓生が数多く活躍する姿が、Hさんの談話からも垣間見られる。

さらにHさんの活動は、地域内にとどまらず、国際交流のボランティア

活動にも広がりを見せる。ここで活きているのも、宮城学院で学んだ英語の力である。Hさんは国際交流事業を宮城県側で受け入れるだけでなく、アメリカなど海外にも足を運び、関わっている。

最近でも、Hさんは新たに戦争体験（仙台空襲）の語り継ぎのボランティアを始めている。戦争中の自身の体験を地元の小学校で語り継ぐ活動である。地域活動から、国境を越えた活動まで、さらには新規性のある活動へと、Hさんのボランティア活動、社会参画はかなり幅広く、Hさんの人生のなかで占めるところの大きさがうかがわれた。自身のボランティア活動について話すなかで、Hさんは「大体宮城で、聖書がどうだの、三位一体がどうだのやって、学校離れて暇ができるとボランティアね、やってる人多いです。やっぱり、毎日聞かされてたから。やっぱり人のために何かしなきゃいけないって思う人が多いのかな」と話してくれた。こうした点にも、宮城学院での学びや、そこにあった「エートス」の反映があるものと考えられる。

4. おわりに——宮城学院同窓生の世界から見えてくる戦後のもうひとつの個人主義——

以上、Hさんのライフヒストリーを検討してきた。終戦直後に宮城学院に学んだ同窓生の談話からは、いくつもの興味深い点が見出された。まず、宮城学院の同窓の縁でのつながり、つきあいを拠り所にした戦後の女性の生き方、それも社会的に活躍する、伝統の枠に収まらない新しい生き方が確認される点である。この当時、学界のみならず社会でも、大塚久雄や丸山真男に代表され、家族や共同体（大塚や丸山の場合、伝統的なそれら）からの分離によって成り立つ、自律した個を理想とする個人主義が注目されていた¹⁶⁾。Hさんの事例が示唆するのは、大塚に代表される戦後の個人主義思想の源泉のひとつとなった内村鑑三の無教会主義を含む、近代日本のプロテスタンティズムの宗教圏から、この時代に、それとは違うタイプの、戦後の

新しい生き方をする女性たちに体现された個人主義が出現していた可能性である。さらには、そうした女性たちの出現を可能にした社会的条件のひとつとして、ミッション系女子教育機関の存在が考えられるということである。

こうした女性たちの生き方を特徴づけるのが、分離ではなく、つながりやネットワークである。いち早く女性の教育や、女性のつきあいの世界やネットワークを研究し、その重要性を強調した天野（2005, 2012）も、ミッション系女子教育機関とその同窓生の世界を、本格的な研究の俎上にはのせてはいなかった。それゆえに、本稿のようなライフヒストリー研究から、戦後の思想を検討する余地や、女性史、戦後の社会史の空隙を埋める学問的意義も展望できる。さらに、戦後の思想を検討するに際しても、ミッション系女子高等教育機関で学んだ人々の体験やライフストーリーの聞き取りは、思想家中心の思想史にはなかった知見や論点を提示する可能性を有する¹⁷⁾。

最後に、こうした女性の新しい生き方を可能にしていた社会的条件として、先行する世代の同窓生たちが地域に存在していたことの重要性を確認しておかねばならない。H家がそうであったが、家族、親族に宮城学院の同窓生が存在し、その人たちも宮城学院とそこでの教育、文化的体験についての集合的記憶を共有していた。家族や親族の間での集合的記憶に、同窓の記憶が深く食い込んでいるわけである。こうした人々が、伝統的な地域やイエの世界を、少しずつ変えていった可能性である。しかも、家族・親族に食い込むことによって、宮城学院が同窓生に与えた影響が持続性を見せていることもうかがわれた。以上の点を踏まえ、今後、上記の変化の後に現れた女性や家庭の姿が、学校の創設者である女性宣教師たちが目指した、近代家族的「クリスチャン・ホーム」の理念といかなる連続性と距離を見せているか、これが同窓生全体の傾向、あるいは他の世代の同窓生にも確認されるかどうかといった問題が検討される必要があろう¹⁸⁾。

謝辞：話者の H さん，宮城学院同窓会関係者の皆様には本研究にあたり，多大なるご理解とご協力を賜りました。あらためて心から御礼申し上げます。

〈注〉

- 1) ここでいう「集合的記憶」については Halbwachs (1968)，片瀬 (2019) 参照。
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C)「東北地方における女子ミッション教育の戦後史」(研究代表・片瀬一男)の一環として，本研究は行われている。本稿が基づくインタビュー調査は，遠藤恵子をリーダーとして行われ，2017年から2018年にかけて企画，実施された。本稿はそこでの談話を検討したものである。第1章1節，第2章から4章まで相澤が執筆，第1章第2節を片瀬が執筆，分析内容や論文の構成等に関する監修を片瀬，遠藤が行った。
- 3) 朴沢学園の当時の裁縫教育，女子教育については菊池 (2013) を参照。
- 4) 談話に登場したのはヘレン・ケラーとサリバン先生，フラナガン神父，パイオリニストの巖本真理や諏訪根自子，前進座の演劇，人形浄瑠璃，近衛秀麿の指揮の交響楽団の公演などである。その他にも「いろんな人が講演にきたりね，なんだかそのころの，なんかその，日本の調味料は非常にうまくないんだからだめ，外国のあれでないと，と，もう外国かぶれね (中略) 日本の伝統のものは全部だめ，教育勅語なんて滅相もないことだしね，本当にガラッとひっくり返ったんだから，あんなひっくり返り方というのはね」と，当時の文化の変容ぶりも，講堂での風景から思い出されていた。H さんにとって忘れられないもののひとつが，前進座によるシェイクスピアの「ヴェニスの商人」の舞台であった。宮城学院の学生，生徒のための講演があり，「みんなで」観劇し，本格的な演劇に感動したという。
- 5) 地元における宮城学院とその教育，それを受けた卒業生の評価が急激に高まった様子を物語る資料もある。宮城学院 (1956 : 85) の昭和24年頃の様子に触れた節に「古い同窓生の一人などさえ，『かつて或る時期，宮城女学校を出たということがうんと肩身のせまい思いをした時代がありました。二次募集をしても三次募集をしても，五〇名の定員が集まらなかったものです。だ

戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義

のにこの頃といつたら、もう宮城を出たと言つただけで、頭はいゝだろう、明朗でやさしいだろう、しつとりとして宗教的だろうと、お嫁さんの口が降るほどかゝるんですから、同窓生としてもこんなに嬉しいことはない。』と語つた」とある。

- 6) 教育における価値転換が大きく現れた領域として英語がある。同時代の女性のライフヒストリーであり、かつ戦後直後における英語の位置づけの変化と、英語教育をめぐる対照的なライフストーリーを含むものとして富岡(1991)がある。
- 7) 戦前から宮城学院の教壇に立ち続けた代表的な外国人教師たちである。宮城学院(1956)でも人物編で取り上げられており、同窓生の談話にも数多く登場する(宮城学院 1966)。
- 8) 『ゴールデン』は当時用いられた教材とのことである。ただ、詳細の確認まではいたらなかった。
- 9) 後に触れる重要な点であるが、Hさんの嫁ぎ先の義母(姑)も宮城学院同窓生である。
- 10) 戦前、そして当時の公立の学校にはない雰囲気は、同窓会のそれに反映されている可能性がある。公立の戦前の女学校とその同窓会における同窓生のつきあいについては、貫田(2007)が詳しい。それによると、公立の女学校同窓生の世界とそのつきあいには、志向の違いによるつきあいの範囲の違いや隔たりが確認される。それに対して戦前は(しかも、戦中であっては抑圧された)少数派であり、戦後も本稿が論じるような独特な経験を経て、これを共有することで、特徴ある集合的記憶を有するにいたったミッション系女子教育機関の同窓生の世界は、公立とは異なる特徴を有するものとなった可能性がある。
- 11) 「私たち専攻科が3年ですからね、そうすると4年大学なんてとんでもないという考え方でですね。だから、私は4年も大学に行くなんて考えてもなくて、昔のように専門学校のように3年制だったらいいのになつて。そしたら私のクラスの半分以上の人がそう思ってるんです、結局。ずっと旧制で来ますからね。そしたら学校も2年で、一応卒業させてくださったんです。ですから、2年修了生として今名簿に残っておりますね」。こうした過渡的措置や学生たちの意向も、当事者の談話から明らかになる。

戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義

- 12) Hさんの娘(実子)も宮城学院卒業生である。親子で同窓生になるケースは、他の話者からも確認される(女子ミッション教育史研究会 2019)。Hさんも「宮城学院はね、なんていうのかしらクリスチャンの、人のいい人ばかり。お母さんがね、宮城出てるから入る子がいて。そういうような感じで家庭的な学校でしたよ」と述べており、こうしたケースは珍しくないものと考えられる。
- 13) 社会学や民俗学などでは、生活実態としてのイエと、旧民法の制度上での家を区別して捉える。家業経営体としての一面を有する生活実態としてのイエについては鳥越(1993)を参照。
- 14) 家業の経営面にもHさんが深く参画していた様子がうかがわれる談話があった。もちろん経営者の妻であるから、経営事情に詳しいこともあろうが、営業だけでなく、人手不足への対応や賃上げ、労使交渉に関することなどを思い出しつつ、仕事から身を引いた後は、それまでずっと続いていた頭痛が止んだ、という話からは、単なる奥様ではない、家業経営にも責任をもって関与していた経営陣の一人としてのHさんの姿がうかがわれる。
- 15) H家の家業は多忙であった。「私も結婚した後は商売に入りましたから、だから日曜に教会行くなんて。たぶん、サラリーマンの奥さんになれば、教会に行ってクリスチャンになったかもしれませんが」とあるように、Hさん自身はクリスチャンではない。H家の姑など、宮城学院の同窓生であった親族も、確認はしていないため推測に止まるが、同様の事情から、クリスチャンではなかったと考えられる。ただしそれゆえに、HさんとH家の同窓生の人々の思想と行動が、宗教社会的には興味深いものとなる。すなわち、女子ミッション教育を受けた人々が身につけた「エートス」が、その後の生き方に与えた影響をうかがうことができるからである。
- 16) 戦後思想史および社会科学史における個人主義については小田中(2006)を参照。
- 17) Hさんの談話の詳細な検討から見出されたのは、つながりや支えあいのなかに拠り所をもつ個人のあり方であるC.ギリガンによる道徳性の発達に関する研究とL.コールバーグとの論争(片瀬, 2002)になぞらえるなら、大塚の提示した自律した個人が、他者からの分離によって成り立つ自律と正義のもとづく個(separated self)であるのに対して、同窓生の談話から見えてく

戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義

るのは、同窓のつながりを拠り所とする個(*connected self*)の姿といえよう。

- 18) 19世紀から20世紀初頭にかけて活躍した女性宣教師は、社会的に自立した女性の先駆けでもあった。こうした自律した近代的個人としての女性たちが、日本における女子ミッション教育の基礎をつくり、自律した女性のロールモデルとして女学生の教師となった。こうした女性宣教師が日本の女学生に伝えようとしたのは、北米白人社会の近代家族的「クリスチャン・ホーム」の理想であった。小檜山によれば、その「クリスチャン・ホーム」の理念は、後にフェミニズムの批判にさらされるものとなった。しかし、Hさんのライフヒストリーには、そうしたクリスチャン・ホーム的な女性像にも収まりきらない、独特なものがある。女性宣教師の歴史については小檜山(2013)、クリスチャン・ホームの理想と女子ミッション教育については小檜山(2018)を参照。

〈文献〉

- 天野正子, 2005, 『「つきあい」の戦後史—サークル・ネットワークの拓く地平』
吉川弘文館
- , 2012, 『現代「生活者」論—つながる力を育てる社会へ』有志舎
- Halbwachs, Maurice., 1968, *La memoire collective*. Universitaires de France (= 1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社)
- 女子ミッション教育史研究会, 2019, 「宮城学院 卒業生に聞く 岩井陽子さん」
宮城学院資料室『宮城学院資料室年報—信・望・愛』24: 23-27.
- 亀崎美沙子, 2010, 「ライフヒストリーとライフストーリーの相違—桜井厚の議論を手がかりに」『東京家政大学博物館紀要』15: 11-23.
- 片瀬一男, 2002, 「公正の道徳と配慮の道徳—コールバーグとギリガン」片瀬一男・高橋征仁・菅原真枝『道徳意識の社会心理学』北樹出版: 79-94.
- , 2019, 「集合的記憶の文化社会学—宮城学院創立記念誌『期にいたりて実を結び』の内容分析」『キリスト教文化研究所研究年報』52: 89-110.
- 加納孝代, 2011, 「青山学院女子短期大学の歩み—卒業生の記憶の中の風景」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』19: 67-86.
- 河見誠, 2005, 「青山学院における女子高等教育の歴史と証言から学ぶこと」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』13: 99-121.

戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義

- 川又俊則, 2002, 『ライフヒストリー研究の基礎—個人の「語り」にみる現代日本のキリスト教』創風社
- 川村清志, 2011, 『クリスチャン女性の生活史—「琴」が歩んだ日本の近・現代』青弓社
- 菊池慶子, 2013, 「近代宮城の裁縫教育と朴澤三代治—裁縫雛形を用いた一斉教授法」『東北文化研究所紀要』45: 59-81.
- 小檜山ルイ, 2013, 「アメリカの帝国の形成と女子高等教育の越境」『キリスト教社会問題研究』62: 63-83.
- , 2018, 「プロテスタント・キリスト教と近代日本のジェンダー・セクシュアリティ」『福音と世界』73(1): 18-23.
- 宮城学院七十年史編集委員会, 1956, 『宮城学院七十年史』宮城学院
- 宮城学院八十年小誌編集委員会, 1966, 『宮城学院八十年小誌』宮城学院
- 宮城県・みやぎの女性史研究会, 1999, 『みやぎの女性史』河北新報社
- 貫田優子, 2007, 「高等女学校同窓生集団の文化と構造—京都府立京都第一高等学校卒業生調査から」『京都大学大学院教育学研究科紀要』53: 379-391.
- 小田中直樹, 2006, 『日本の個人主義』筑摩書房
- 大門正克・安田常雄・天野正子編, 2003, 『戦後経験を生きる』吉川弘文館
- 富岡多恵子, 1991, 「英語に怨みはかずかずござる」安田常雄・天野正子編『戦後体験の発掘—15人が語る占領下の青春』三省堂
- 鳥越皓之, 1993, 『家と村の社会学 (増補版)』世界思想社